

## ハイドンに学ぶ

### 「宮仕え」と「イノベーション」の関係



図 1 Franz Joseph Haydn

「交響曲の父」ヨーゼフ・ハイドン (1732-1809) は、交響曲のみならず室内楽や協奏曲においても傑作群を遺し、今日我々がクラシック (古典) 音楽と呼ぶものの骨格を作った人物である。近年、バリトンという風雅な弦楽器を用いた 100 曲以上もの室内楽作品や、オペラをはじめとする 30 曲以上の舞台音楽が再評価され、一昔前のクラシックファンが持っていた若干地味な印象

が覆されつつある。ハイドンの人生については、エステルハーゼ侯爵家に仕えていたこと、その後ロンドンに渡り後期の有名な交響曲群を作曲したこと、晩年はナポレオン軍侵略の嵐の中、ウィーンで亡くなったこと、モーツァルトの先輩かつ友人でありベートーヴェンに作曲を教えたことになっていること、もう一つ付け加えると妻は悪妻であったこと、くらいしか印象に残っていないだろう。人柄も温厚で、長生きをし、劇的なエピソードもあまり知られていないハイドンが、なぜクラシック音楽という画期的な様式を創造することができたのか、その人生論から答えを導くことは難しいように思われる。この難題について、企業研究所において物理化学の研究開発に従事する筆者が、宮仕えとイノベーションという観点から考察を行う。自由な発想、真に文化的な発想は自由業でなければ湧かないのか。そうでなければ、宮仕えというシステムの中でどのようにイノベーションは起こるのか。有名な交響曲からコンサートではあまり演奏されない作品までを聴きながら、ハイドンの秘密に迫りたい。

#### 本日のレジュメ

##### I. はじめに

真面目な音楽家

音楽の器 (杵組み) と注ぐ美酒

本講演シリーズ?の予定

問題提起: ハイドンの生涯

##### II. ハイドンの魅力

ピアノ弾きにとってのハイドン

チェロ弾きにとってのハイドン

バロック, 古典派, ウィーン古典派

チェロ協奏曲第一番

チェロ協奏曲第二番

##### III. ハイドンの生い立ち

ウィーン少年合唱団と弟ミハエル

ストリートミュージシャン・ハイドン

最初の就職: ポストク, 任期付楽長

「室内楽」の誕生

出版: 田舎に居ながら世界を征す  
 エステルハージ就職  
 結婚生活について  
 朝・昼・晩

IV. 革命者, ハイドン  
 バリトン三重奏  
 告別  
 天才の時代とシュトルム・ウント・ドラング  
 "単純"と"複雑"の螺旋  
 オペラの時代  
 古典派様式の完成  
 規範としてのハイドン  
 日本との関係

V. 晩年のハイドン  
 定年  
 ロンドン公演  
 ロマン派の先駆け (1): ハイドンはトルテ弓を使ったか  
 ロマン派の先駆け (2): 後期ピアノソナタとアンダンテ  
 後期ミサ曲: 交響曲と合唱の融合  
 燦然たるオラトリオ  
 神よ, 皇帝フランツを守り給え

序奏	提示部		展開部	再現部		コーダ
	第一主題	第二主題		第一主題	第二主題	
主調	属調、平行調等		主調	主調、同主調		

図2 典型的なソナタ形式



図3 ハイドンの活躍した地域  
 (図1-3の出典: Wikipedia)

### 講演者について

鷲津仁志 1970年愛知県生まれ。  
 愛知県立千種高等学校, 東京工業大学を経て東京大学大学院博士課程修了, 博士(学術)取得。  
 出版社を経て, 現在, 企業研究所にて研究に従事。専門は界面の物理化学の大規模分子シミュレーション。文科省次世代スパコンプロジェクトに参加。現在, 京都大学拠点研究代表者, 名古屋大学非常勤講師などを兼任。



'74年からピアノを, 米国クリーブランドにて Birute Smetona, 京都にてカズコ・マサダ・ザイラー, 名古屋にて磯村奈々の各氏に師事。'82年からチェロを林良一氏に師事, 名古屋青少年交響楽団に所属, バルトーク弦楽四重奏団の第一回公開レッスン受講, 現在もセンチュリー室内管弦楽団などにエキストラ参加多数。

'88年から現代詩を鈴木志郎康氏に師事。  
 '94年エジプトにてストリート音楽に目覚め, アコーディオンとチェロのストリートユニットを神田神保町にて結成。表参道ストリートをはじめ, クラブ, 美術館, 結婚式など広範に演奏活動。  
 他に, くものすカルテット, The margarines, 桃梨, J.e.t などのバンドのライブ, CD にチェリストとして参加。最近では, 親鸞聖人750回大遠忌に際し宗教曲を弦楽二重奏に編曲し東別院にて演奏, 尾張温泉にて演歌の瀧慎太郎氏をチェロ一本で伴奏し好評を博す。

作曲は '74年よりはじめ, チェロ協奏曲('84)など。作品は川崎 K-CITY FM, 東京 MX テレビなどで放送された。最近では, 室内楽の小品を中心に作曲しており, 「弦楽四重奏のための福島 (の日本人)」('11), 「ソプラノ, オーボエ, 弦楽四重奏のためのヴォカリーズ」('13)など。

エッセイ 1 (もともと、企業に勤める若手理論物理研究者を励ます文章でした)

2009年4月11日: ハイドンのオペラ時代

現代日本の働く人々の大多数は会社員であるから、「プライベートな組織に仕える」ことにまつわる エトセラについては周知のことと思う。であるにもかかわらず、こと芸術や科学などの 創造的なものとの相性は悪いように見える。「宮仕えをすること」と「創造的であること」とが 両立しないのではないかという恐怖がある。社会に取り込まれちゃった大人、という奴だ。これを子供の頃に感じるのには良くわかるのだが、それを抱えたまま大人になって、本を書くような職業につく人も大変多い。「会社では理論物理の研究はできない」という 恐怖などもこの典型であって、その半分は正しいのだが 残りは間違いである。どう間違っているか、を理解するためには、ハイドンの人生について考えてみたらいい。

ハイドンは、6歳まで比較的裕福な車大工の家庭で生まれて、6歳のときに親戚の音楽教師の家に修行に出て、8歳のときに現在のウィーン少年合唱団に入り、17歳のときに声変わりのため追い出されて、音楽的フリーターとなり、ストリートミュージシャンとなった。これを10年ほどやっている間に作曲と鍵盤を独学し、27歳のときにモルツィン伯爵家に雇われて、2年後に倒産、29歳にしてエステルハーゼ侯爵家に就職し、以降30年間勤め上げた。

このプライベートな宮仕えの期間、彼は、論文や特許や報告書、じゃなかった、交響曲やオペラやバリトン三重奏などを書きながら 上司たる侯爵のニーズに答え続けた。第二ヴァイオリンとテノール歌手がクビになりそうになったら「第二ヴァイオリン氏は合奏の要であり必要であり、テノール歌手は子供の合唱の教育者としても必要です。私の願いを聞き届けていただけたらバリトン三重奏作ります」などと、楽団のボスとして上司と交渉したりした。そう、バリトンという楽器好きの侯爵のためにも、百曲以上も書きまくった。楽団のそれぞれのパートは名手揃いであつたため、「朝、昼、晩」交響曲のような、独奏楽器を生かす曲を書き、メンバーに活躍の場を与えた。こうして書かれた交響曲や協奏曲、弦楽四重奏が、ずっとイノベーションをもたらし続けたというのがすごい。そして作られた交響曲などは、それぞれの ジャンルの歴史そのものとなった。雇い主の要求に応えることと、イノベーションとが 矛盾なく両立したのだ。若きストリートミュージシャンおよび 宮仕え研究者にとって、生きるヒントが満載の人生である。

ここまではいいだらう。行きつけの「アートライブラリー」にはハイドンの本が沢山あって、大体そういったことが書いてある。その中の、井上和雄「ハイドン ロマンの軌跡」を読んでいて、ふと気になることがあった。この本では、弦楽四重奏の第二ヴァイオリンたる著者が ハイドンの弦楽四重奏の作品に沿って 生涯と作品とを解釈していつているのだが、弦楽四重奏の歴史をぬりかえる傑作である 作品20を1772年に40歳で書いた後、次のこれまた 弦楽四重奏の歴史をぬりかえる傑作である 作品33を1781年に49歳で書くまでの間、10年近くのスランプであつたと述べているのだ。著者は交響曲は詳しくないそうなので、別の著書からの引用により、その期間の交響曲は序曲などのつぎはぎが多く 停滞していた、ということをもって 自説を補強している。

ところが、この時期のハイドンはオペラを書いていたのだ。「月の世界」「報いられた真心」といった名作を 次々に書きまくっていた期間だったのだ。これらのオペラは、エステルハーゼ家の離宮である エステルハーゼのオペラハウスで上演されるために作曲されたもので、モーツァルトのオペラのように ウィーンやプラハなどの都市で演奏されなかったために 音楽史的な影響力を持つことはなかったが、紛うことなき傑作群である。オペラやマリオンネットオペラなど舞台音楽が主、の期間だったため、交響曲は これらの序曲を転用したわけであるし、弦楽四重奏の新境地を開拓している暇はなかった。いや正確には84年くらいまではオペラ時代であつたため、作品33の弦楽四重奏の改革も同時に行っている。

ここで魂の問題にいきつく。ハイドンは、その音楽人生において、いわゆるスランプは なかったというのが実態ではないか。チャイコフスキーは第四交響曲を書いてから第五を書くまでの 約10年間は、確かにスランプであつたと本人も述べている。シベリウスは第七交響曲を書いて以降は亡くなるまで 何十年もスランプだった。そういう意味での、スランプは、ハイドンにはなかったのではないか。30代から、ハイドンは間違いなく勤勉に、毎年毎年イノベーションを続けていた。上記の本の著者は、30代までは歴史的な存在ではなかったが40歳の作品20を書いて化けた、というような書き方をしているが、実際は、「朝、昼、晩」も30代の作品だし、我々チェロ弾きなら誰もが古典派時代の最高傑作の一つだと 認めるハ長調の協奏曲も30歳前後の作品である。弦楽四重奏だけについては、1760年前後のハイドン作品をみると、同時代のボッケリーニの作品のクオリティには負けていると思う。しかし、協奏曲や他の協奏曲の性格の強い交響曲については 間違いなく30代から一流であつたし、ピアノソナタでも そうだったのではないかと思う。40歳前後に「シュトルム・ウント・ドラング」の名作群を書いた ハイドンは、その後もオペラに注力して傑作群を書いた。交響曲だけ、あるいは弦楽四重奏だけ、に注目していると、誤認する。あるいは、同時代人にとっても、エステルハーゼで上演されている音楽にふれる機会の なかった人々にとっては、ひょっとしたら40代のハイドンは「消えた」あるいは「弱まった」ように見えたかもしれない。しかし、客観的にみたらハイドンの音楽人生にはスランプがな

い。上記本の著者は、ロマン云々についての主張は首肯できる部分が 多くて立派な本だと思うのだが、ハイドンの音楽人生の全体像の 認識については、根本的な部分で誤認しているように思われる。

ハイドンのオペラ時代について、誤った認識に陥る理由は、実はもう一つあると思っている。それは、ハイドンがオペラを書きまくった理由についてだ。現代の芸術家は、あるいは大学の研究者は、本人の内的な欲求によって創造したものだけが 最上のものであると、心のどこかで思っていないだろうか。ハイドンのオペラは、雇い主がオペラハウスを作ったために 外的な事情によって作られた。ディヴェルティメントなどが「機会音楽」と呼ばれるように、ハイドンのオペラも「機会音楽」だと思われていたのではないか。しかし、それを言ってしまうと、ハイドンのあらゆるジャンルの 音楽は、交響曲や弦楽四重奏でさえ、「機会音楽」である。「機会音楽」であることと、一級の芸術品であることとは、矛盾したり直交するような関係ではない。一級の雇われ芸術家は、ジャンルをかえさせられても一級のままだ。一つの狭いジャンルだけを探求している人、あるいは自分から内的にしかジャンルをかえたことがない人には、これが なかなか理解できない。一級の雇われ芸術家である条件は、一つのジャンルに囚われないこと だともいえる。ハイドンは、交響曲作家と自己規定していたわけ でもなく、宗教曲作家でもなく、ただ単に「音楽家」であったのであろう。

大学院でたまたま理論物理で一仕事できたために 自分のことを「理論物理屋」だと狭く自己規定している人にとっては、会社では「理論物理はできない」場所ということになる。なぜなら、会社は「理論物理もできる科学技術者の居場所」でしかないからだ。自分のことを、広く科学技術者であると自己規定できる人には、会社で理論物理を研究する機会も与えられるであろう。雇い主のニーズに対して、まず科学技術者としてそれを 広く俯瞰することができれば、自分の得意である理論物理の適用対象と方法とを見出せるし、あるいは全く新しい科学を開拓することも可能となる、それと同じ意味で、ハイドンは真の「音楽家」であった。彼はボーイソプラノという声楽から音楽はじめて、鍵盤楽器や ヴァイオリン、そして作曲へと進んでいった。20 代のハイドンはダッシュしていた。自分はヴァイオリンを弾きながら、街中のストリートミュージシャンをけしかけて、一斉演奏を行い、警察に追われて、結局コントラバスとティンパニ奏者が 逃げ遅れてつかまるわけだが（彼らはハイドンが首謀者だと 口を割らなかつた）、その瞬間も、つまり 20 代のハイドンも、一流のストリートミュージシャン であったであろうと、わしは推測する。

エッセイ 2（息子が生まれた頃に書いた文章です）

2009 年 9 月 2 日：ハイドンのメヌエット

シンプルだけれども、とても良い音楽に、Six Minuets for Two Cellos by Franz Joseph Haydn Edited by Frances J. Steiner. がある。作曲者は、かのハイドン。しかし、曲はそれぞれトリオを含めても 50 小節にも満たないメヌエット。二本のチェロのための編曲。チェロを習っていた頃に教えていただいた。

わしに音楽を、ピアノをチェロを勧めたのは 父親だったのだが、なぜか一緒に合奏しようと 言ってくれたことはなかった。父は、はじめヴァイオリンを、つぎにヴィオラに転向して、アマチュアオーケストラで嬉々として弾いていたのに 不思議であった。今、エキストラをやらせていただいているアマオケでは、ファーストヴァイオリンの前から 2 プルトがそれぞれ親子関係であり、とても幸せそうに弾いている。そういう感情が自然だと思う。

わしからみても、父はヘタクソだなあと思っていたのだが、今から思うと昭和一桁生まれにしてはブラームスの交響曲のヴィオラパートを弾けるというだけでも立派なものであった。以上のことを母に言うと「彼はプライドが高かっただけで、あんた程度に弾けていたならば喜んで合奏してたと思う」と述べた。

その父親と一緒に演奏する機会はなかったのであるが、ある日、このハイドンのメヌエットの一曲目を通してハ音記号で書かれてあるのに気がついて、これならオヤジにも弾けるだろう、と切り出してみた。

そのささやかな合奏は、ほとんど覚えていないくらい地味なものであったが、満足だった。

ところで、この曲は確かに J. ハイドンの作曲とあるのだが、どの曲集からの抜粋であるか、所有している楽譜には書いてなかった。

ハイドンの 150CD (150 枚全てハイドンの作品!) を購入したとき、メヌエット集の CD があったので それを聞いてみたが、このメヌエットは入っていなかった。

最近になって、通勤や、病院通いのときなどに、この 150CD の中の「バリトン三重奏」集を順番にカーステレオで聞いていた。「バリトン三重奏」は、ハイドンの雇い主であるエステルハーゼ侯爵が、自分自身の 夜の愉しみのために、バリトンという貴族しか購入演奏できない 高貴な楽器と、ヴィオラとチェロのために極私的に書かせた 120 曲以上ある曲集である。

昨日、平和公園の坂を急いで下りていく途中、突然、それは鳴り響いたのだった。「ハイドンのメヌエット」、ニ長調。バリトン三重奏曲の第 78 番の 2 楽章なのであった。